

世界・地球 一周の船旅

新・顔の見える手紙
世界・地球一周の船旅 9号
イースタ島

2015年2月発行

原田公平

274-0812 千葉県船橋市三咲 5-20-36

Mail:chibaharadakohei@yahoo.co.jp

カヤオ～イースタ島 3807 ｷ_ㇿ計 39263 ｷ_ㇿ

イースタ島で共に遊んだ人

ボクにとって夢のまた夢、イースタ島へは、瀧恵子さんと訪れた。

彼女との縁は、マチュピチュ&ウユニの長いツアーから髪の毛ぼうぼうで帰ったボクに、「こうちゃん、これ」と、ヘアerbandを頂いた。

それはカラフルなインカの織物で作られていた。垂れ下がる前髪がいやで、すぐにそのヘアerbandを着用した。

すると思わぬ反応が、「こんぺいさん（ボクのニックネーム）、それよく似合う」と行き交う人、みんなが絶賛してくれる。

えっ、と自分まで驚く。そして下船までずっと愛用していた。



瀧さんとヘアerbandのボク

プレゼントしてくれた方は兵庫から1人で乗船の、瀧恵子さんだ。

彼女は、ボクと同室の元船長の木村さんと親しかった。木村さんは乗船前に心臓手術をしていて、病み上がりだった。寄港地でのツアーは『歩行すくなめコース』を選び、最初の上陸地、中国・アモイで瀧さんと一緒になる。彼女の身体が不自由なので手助けをしてあげた。そして毎回のツアーは『歩行すくなめコース』で、すっかり彼は頼りにされるようになったらしい。

木村さんから聞いた。彼女は筋肉が弱っていく難病だという。そこで彼女は思い切って以前に参加したピースボートに、人生最後の旅にと、乗ってきたというのだ。

木村さんはよく彼女と食事をしていて、その都度、ボクにも声をかけてくれた。

瀧さんは元気そうで、そんな大病とはまったく感じさせなかったし、ボクもそう深刻に考えたことは、一度もなかった。

一方、瀧さんはとても積極的で、ボクが主催の「3分間スピーチ教室」や「アメリカやインドの旅」の講演などにも参加してくれた。



3分間スピーチ教室の瀧さん（右端）

いざ、イースタ島へ

イースタ島には『歩行すくなめコース』がなかった。瀧さんには付き添ってくれる旧知の稲葉さんという親切な男性がいたが、彼女からボクに「一緒に」行こう」と誘われ、「OK」と彼女と船旅の終盤で初めて、一緒にツアーをすることになった。

イースタ島は周囲 60^{キロ}、小豆島ぐらいの大きさ、火山で出来た島で、大型船が着岸できない。

テンダーボート(7~8人乗り)を使う。1000人近い人が上陸すると島はピースボートの人であふれかえるし、船から小舟での移動が無理なので2日間滞在する。初日の人は雨にあい、散々だったが、ボクたち2日目は天気に恵まれた。



ライフジャケット着て島に向かう

身体の不自由な人の世話がモットーの稲葉さんと、毎年100号の油彩を書いている89歳の女性、村上さんに彼女とボクの4人、全員ライフジャケットを着て出発する。

まずは本船から小舟に移るが、大仕事だ。沖に停泊しているオーシャンドリーム号の一番下の出口に、タラップは設置され、乗組員がリレーで1人ずつ手を取り、一步一步通船へ誘導される。波は荒く、小舟は木の葉のように揺れている。

ここはボクの出番だ、瀧さんに寄り添い、クルーに彼女の事を説明する。小舟に移り着舟の瞬間は、緊張した。

ボートはすごいスピードで島に向かい、波しぶきがかかる。そしてみるみる、本船が小さくなっていく。これも船旅ならではのスリリングな思い出だ。



停泊中のオーシャンドリーム号とボート

火山噴火口跡と伝説の島

モアイ制作現場らから上に登ると大き



な火口が口をあけている。その背後には船内で観た、モアイの映画の舞台、オロンゴ岬と伝説の3つの島が並んで見える。

火山跡や伝説の島は厳しい登りだったが、彼女は自力で登り、ツアーすべてを見ることができた。ボクもモアイ像の周りを歩いたり、モアイの顔を眺めたり、写真を撮ったりした。そして、無事に計画通り彼女とイースタ島めぐりを終えることができた。

船旅を終えて

ピースボート、105日間の航海を終えて、2014年3月6日に横浜に帰国する。

ボクはピースボート3回目の乗船を目指して、すぐに新しくオロンゴ岬と伝説の島
ボクが参加しているサークルで「船旅」の話をし、一方ではまた、モアイ像の周りを歩いたり、モアイの顔を眺めたり、写真を撮ったりした。そして、無事に計画通り彼女とイースタ島めぐりを終えることができた。

その度に、彼女のことが気になり、思い切って電話をした。元気そうだったが、帰国後、車いすになったという。そして彼女が編集した写真のDVDを送ってくれた。

写真の構図のうまさ、パソコン技術や文書表現力がとつても秀でている。

そして彼女とのメール交信が始まった。

瀧恵子さんからのメール

2014年5月13日

コンニチワ 懐かしい公平さんのお声にびっくり！私のこと覚えてくれてたんだと思うと、とても嬉しかったです。DVD見て頂いた。本来なら、もっともっと巧く撮影出来てたのですが、体調の都合で撮影できず殆ど写して貰ったり、頂いたりした写真です。でも、そもそも元気な体でしたらP. B（ピースボート）に乗船してません。ALS（筋委縮性側索硬萎症）と云う難病を告知されて、今しかない！と慌ててギリギリに申込みました。第1回目（56回、2009年）P. Bの友人は4人乗船していましたが、部屋、行先もバラバラでしたし、決してお荷物になってはいけないと自戒してました。

ラッキーなことに木村さんと知り合い、各寄港地ではサポートして頂きました。木村さんも心臓の手術後の為、あまり無理したくないご様子でした。木村さんには妻でも 恋人でもないのに、すっかりお世話になり、本当に有り難く感謝しています。船内生活ではお友達も出来、楽しく過ごすことが出来ました。



瀧さんの仲間 白ボロ木村さん、右2番目稲葉さん右端、瀧さん

帰港して自宅に帰っても、夫が手厚い介護をしてくれています。

病は日に日に進行してありますが、ゆっくり食事し、武庫川の流れや山の緑を眺め、優しい夫の笑顔に包まれて、このまま死ねたらどんなに幸せでしょう！P. Bに乗って病んでたからこそ？人の情けが身に沁み、神様仏様は何処にでもいらっしゃるのだと思いました。又、日本への帰港間近な時、見ず知らずの人が「良かったですね 無事に帰れて」と、それぞれ声をかけて下さいました。温かく遠くからも見守って頂き感謝、感謝です。さて 公平さんとは三途の川を渡った処の居酒屋で大いに呑み明しましょう！お先に往ってお待ちしています。ゆっくり遅く来て下さい。滝 恵子 拝

その後、5/15、6/15、7/31、8/1と4回、メールを頂いた。

しかし、そのメールのコメント目に見えて少なくなり、7/31は2行、そして8/1は「今日から入院します」と最後のメールとなった。

そして音信が途絶えた。

11月の中旬、瀧という男性から喪中はがきが届いた。

「瀧」、まさか、瀧恵子さんでは、悪い予感が的中した。ご主人さまからのはがきだった。

8月11日に亡くなったと、そして69歳とあった。

乗船中はあんなに明るく元気だったのに。

しかし、よく考えてみると、彼女は病いを知り、そして人生最後の旅に2回目の「ピースボート」を選んだ。

船内での彼女は実に明るく、常に大勢の仲間とバーで楽しそうだった。瀧さんのDVDも、寄港地では実に積極的に、行動している。

また、彼女の部屋で仲間とお酒を飲んだりおしゃべりをしていた。ボクも何度も誘われたが、航海中は自分の自主企画や他の教室に参加で、忙しく一度も参加できず、そのことがとても心残りだった。

そして心残りのもう一点は、何ととっても、彼女と巡ったイースタ島ツアーのエッセイを書いて、瀧さんに読んでほしかった。

その旨は伝えてあったのだが、間に合わなかった。

彼女は69歳の生涯だったが、あの明るさ、おもいやり、行動力は100歳の人生に匹敵するものだったと、思う。

ピースボートでは色んな人と出会いがありましたが、瀧恵子さん、ボクの心に強く残る人でした。この稿は彼女を偲びながら書きました。



滝 恵子

瀧恵子さんの名刺

お目にかかった時にいただいた名刺、なんとピンクの地に素敵なイラスト入りで、センスのよさが露出。

編集後記 —あなたがもし、不
余命1年と、医師から宣告され
の1年をどう過ごしますか—そ
命を背負った方、瀧恵子さんとは
の寄港地、アモイ上陸後の夜だつ
室の元船長の木村に紹介する人
と、誘われて、出会ったのであ
の『航海記』も終盤の、イースタ
しかかった。ここは、今回の旅
に入る先だ。その中で、瀧さん
書くべきか、秘したままにするか
だ。親しい友人数名に聞いたら、
書くべき」と、背中を押してくれ
想を何度も練ってみる、イースタ
心にするか、それとも彼女を主に
今まで、エッセイを書くのにこ
んだことはない。そして、ボク
イの師から、イースタ島と彼女
るのがいい、とアドバイスをも
うにか、まとまった◇書き終え
瀧恵子さんは、実に、タフな
いつも、笑顔を絶やすことなく、
に耳を傾け、人の輪が広がって
彼女の制作DVDから、全寄港地
イント箇所を訪れては、うまく
ている。彼女は地球2周の航海で
も多くの世界を見て、そして逝
瀧恵子さんの素晴らしい人生に